

2014. 10. 1 (水)

## 孤独について—そこで満たされる経験

Jeffrey Mensendiek

今日のテーマは、いろいろと考えさせられました。孤独って何だろう？チャペルで孤独について話すことの意味は何だろう？きっと皆さんも孤独について語れるものは山ほどあると思います。現代社会に生きる私たちにとって、孤独は避けられない現実です。日常的な生活の一部とさえ言えます。聖書にはイエスが一人で十字架にかけられ、孤独な最後を遂げたことが記されています。しかし、聖書で見るイエスの孤独と、そして現代に生きる私たちの孤独は、同じものなのでしょうか。

### 孤独の二つの意味

国語辞典によりますと孤独とは「仲間や身寄りがなく、一人ぼっちであること。思うことを語ったり、心を通い合わせたりする人が一人もいなく寂しいこと。」とあります。ですから、孤独には二つの要素があると思います。一つ目は一人であるということです。孤独とは、単独で周りに誰もいない状況のことです。二つ目は、一人ぼっちで寂しいという気持ちも含まれた状況のことです。

一人でいることは必ずしも寂しいとは限りません。例えば、私は吉岡記念館で日々働いていますが、そこに宗教総部というサークルがあります。彼らは今、献血運動を実施して

います。リーダーたちは1日中人と接して、忙しくしています。毎日、人に配慮をしながら走り回っている彼らにとって、少しでも一人になれる空間や時間は貴重です。一人になる時間を与えられたとして、彼らはきっと寂しいとは思わないと思います。むしろホッとして、安堵感を感じると思います。ですから、一人でいることは決して寂しいということにはつながらないのです。

英語で「孤独」は2つの単語に訳されません。

1) Loneliness: Characterized by a depressing feeling of being alone./ Remote from places of human habitation./ Standing apart/ Desolate.

意味としては、寂しいという気持ちの部分が含まれ、サポートがないことや、一緒に居てくれる人がいない状況のことを言います。その他、人里離れたところ、殺風景、離れているという意味があります。

2) Solitude: The state of being and living alone./ Remoteness of habitation./ A lonely and unfrequented place.

意味としては一人であることです。めったに人が立ち入らない領域を言います。寂しいという気持ちの部分は含まれません。

英語で考えて見ますと、前者の Loneliness には寂しい気持ちが含まれますが、後者の Solitude にはむしろ一人で存在している状況が現れているのです。この2つの英単語からしても、孤独というものには二つの要素があることがよく分かります。

皆さんはどうでしょうか、一人になりたい時ってありますよね。一人になりたい時って、どんな時でしょうか。自分の考えを整理したい時。心を確かめたい時ではないでしょうか。自分が自分でいられる時。次のステップを踏み出すために必要なスペースではないでしょうか。私は内向的な性格なので、一人でいる時間が必要です。社交的な人は他者と接することからパワーをもらうのですが、私は一歩引いてパワーをもらうタイプです。そういう私たちにとって Solitude という意味の孤独は、すごく意味のある、価値のある時と言えるのではないのでしょうか。そんな現代の私たちが聖書を開いて、今日、打樋先生に読んでいただいた聖書の箇所と出会うわけです。

### 寂しいところへ行きなさい

イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて人里離れた所へ出て行き、そこで祈っていました。英語でここには Lonely という言葉が使われています。人里離れた所へ行ったのです。すると、弟子たちはイエスのことを見つけて、「皆あなたを探しています」と言って、イエスのことを呼び戻すわけです。イエスは「私は近くの街や村に出て行く。そのために私は来たのだから」と言って、どんどん忙しい生活に戻っていくのです。けれども、この

『マルコ福音書』に少しでも触れられているのが、イエスご自身がそういう寂しい所を必要としていた姿です。孤独になる場所をイエスはあえて求めたのです。

マルコ福音書6章を見てみましょう。30節にこんな言葉があります。「さて、使徒たちはイエスの所に集まってきて、自分たちが行った事や、教えた事を残らず報告した。イエスは、『さあ、あなた方だけで人里離れた所へ行ってしばらく休むがいい。』と弟子たちに、勧めているのです。もちろんこれは休む意味もあるでしょう。しかし、それだけではありません。寂しい所に出て行きなさいと勧めたのには訳がありました。イエスもそういうことを大事にしていたのです。いつも人と接してばかりいないで、寂しい所を大事にしろなさいという勧めは、福音書の中で繰り返すことができます。

### 私の経験から

今回ほどドキドキしながらチャペルのお話を用意したことはありません。なぜでしょうか？なぜ孤独について話すことが、私をこんなにドキドキさせるのでしょうか。「聖書にはこう書いてある。」と結論づけて話もできるのですが、自分はどうだろう？孤独についてどう思っているのだろう？と考えたのです。自分の人生の中で独りぼっちに感じたことは沢山あります。皆さんもきっと孤独と向き合って生きてきたと思います。私は自分の経験から、皆さんと孤独について分かち合えるものはあるだろうか？そう考えたとき、自分の経験を振り返りながら、ただ1つだけ語れる結論を見つけたのです。

これはとても不思議なことですが、

私は最も孤独な時に、そこで満たされるという経験をしています。それは1回だけではなく、自分の人生の中でぼつりぼつりとあるのです。自分が疲れてぼろぼろになって、迷って、弱さを痛烈に感じたその時に、あり得ないもう一つの経験をするのです。これは何だろうと思いながら、私は満たされ、安心感や平和を知ります。人間として生きてきてこんなに孤独なのに、同時にこんなに満たされています。それは何でしょうか。

例えば、昔のことですけれども、人間関係に疲れ、ある親友との信頼関係が壊れてしまった時期でした。私はある人に自分の深い悩みを打ち明けることにしたのです。語りながら、色々なことを思い出し、私は涙ぎりぎりの状態でした。自分の孤独な気持ちに触れると、どんどんその孤独が深くなっていきます。そんな想いで心を打ち明けていた時に、目の前でその人はポロッと涙を流したのです。今思えば、涙って目立たない小さなものです。ほんの一粒の小さな涙です。私は驚きました。「えー、私が辛いのにどうしてあなたが泣くの？」って思いました。

自分が尊敬するこの人生の先輩。この人には悩みがなさそうだと思って心を打ち明けていたのに、この人もその孤独を知っているというか、寂しい所に行ったことのある人だったのです。彼の涙を見て、それが何となく不思議に励まされたのです。自分が最も孤独に向かおうとしていた時に、そこにもう一人孤独を知っている人がいた。そのちょっとした涙（その涙がどこから来たかは聞きませんでした）を見て私は思ったのです。「ああ、自分が一人で悩んでいるのではない、生きてってなんと美しいことだろう。孤独と孤独が

出会う時に、素朴な瞬間の中に、人はお互いを励まし合えるのだ。」この時に、私の中で不思議なものが広がって、満たされたのです。神様が私を満たしてくれたのです。

## 孤独は神様と出会う場所

今年、関西学院は125周年を祝っています。スクール・モットーのマスタリー・フォア・サービスには、自分を律するという意味があります。そこには自分の孤独をも律する意味も含まれているのではないのでしょうか。長い人生、孤独とどう向き合っていくかということです。新しく立った記念講堂の脇には、「旌忠碑」という記念碑があります。昔の戦争で関西学院から送り出された兵隊たち167人の名前が刻んであります。その過去とどう向き合っていくのかということを、関西学院は大事にしているのだと改めて思います。

孤独や答えが無い寂しさと向き合うことで、それをマスターしていくこと。その経験を通して私たちは自分が一人になる時にこそ暗闇に光が差すことを知るので、孤独になったからこそ光を知ることがあります。皆さんに、そういう人生を歩んでもらいたいと思います。自分の弱さや孤独が悪いものではなくて、思ってもみない神様の祝福の場となるのです。

きっと昔のイエス様も弟子たちの事を思って、「寂しい所に行きなさい。そこはあなたが神様と出会う場所ですよ」という勧めを、あえてしていたのではないのでしょうか。

(宗教センター宗教主事／神学部准教授)